

保育所保育指針・保育士養成課程基準を踏まえた乳児保育の授業展開の検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坪井, 葉子, 堀, 純子, Tsuboi, Yoko, Hori, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2224

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育所保育指針・保育士養成課程基準を踏まえた 乳児保育の授業展開の検討

Examination of Class Development in the Subject “Childcare for Children under 3 Years Old”
Based on National Standards

坪井葉子、堀 純子
Tsuboi Yoko, Hori Junko

1 問題の所在

1-1 乳児保育についての社会的背景

共働き家庭の増加及び核家族化等の社会の変化に伴い、近年、3歳未満児の乳児保育のニーズは増大してきた。一方、受け入れ先の認可保育所が確保できず、待機児童問題が発生した。認可保育所が新設され、既存の幼稚園が認定こども園へと変更するなどして、この待機児童問題に対応してきた。そのような社会状況の変化の中で、保育者養成校において乳児保育をこれまでよりも深く学ぶ必要性が生じてきた。

1-2 保育所保育指針の改訂

保育所保育指針は2018年に改訂された。乳児保育についての「ねらい」と「内容」等に関する部分は改変され、記述が増加した。『保育所保育指針解説』では、「3 改定の背景及び経緯」の項で1、2歳児を中心に保育所利用児童数が大幅に増加していることに触れている。加えて「4 改定の方向性」では方向性の一つとして「乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実」が挙げられ、3歳未満児の保育の意義をより明確化し、その内容について一層の充実を図った旨が述べられている⁽¹⁾。

1-3 保育士養成課程科目の変更

保育士養成課程の科目も乳児保育に関する必要履修科目が増加するよう変更された。改訂前の「乳児保育」は演習科目2単位のみであったが、改訂後は講義科目2単位の「乳児保育Ⅰ」と演習科目1単位の「乳児保育Ⅱ」となり、講義科目2単位分が追加され、内容についても充実することが求められた。

2 本研究の目的と方法

本研究では2019年度入学生から適用される保育士養成校養成課程の新たな乳児保育学習の枠組みに沿った授業展開について、筆者らが授業に携わっているS短期大学学生の学習実態の把握を試み、

学習実態を踏まえた授業展開への示唆を得ることを目的とする。

本稿においては、まず厚生労働省が示す保育士養成校養成課程科目としての「乳児保育」の教授基準について確認・整理し、次にS短期大学におけるシラバスに示される授業展開と厚生労働省の基準との整合性を確認する。さらにS短期大学における学習の実態を把握するために実施したアンケート調査とその結果について述べ、学生の実態に沿った合理的な授業展開の工夫について検討する。

尚、本稿で検討する「乳児保育」に関する養成課程基準は2019年度入学学生より適用されているため、新基準に則った授業実態調査や授業研究は今後の発信が期待される分野である。

3 保育士養成科目としての「乳児保育」教授内容の基準

2021年度現在の保育士養成課程は、2019年度入学学生より適用されている。本項では、教科目に指定されている「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」の目標と教授内容を旧課程の基準と比較し、教授内容で重視すべきことを明確にする。また課程改定の経緯を確認しその背景を明らかにしておく。

でははじめに現在の保育士養成課程科目の「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」と旧課程の「乳児保育」の目標と内容を比較し、教授内容で重視すべきことを明らかにする。旧課程では「乳児保育」(演習2単位)のみで、その中で乳児保育の理念、役割、乳児保育の現状と課題、3歳未満児の生活を遊び、保育の計画・記録等、保護者や関係機関との連携を学ぶ構成になっていた。しかし現行の新課程では、「乳児保育Ⅰ」(講義2単位)、「乳児保育Ⅱ」(演習1単位)の2科目が設置され、「乳児保育」に関する理論・概念や見方・考え方を講義科目で学習し、それを土台として演習科目によって乳児保育の実際を演習で学ぶカリキュラムが示された⁽²⁾。

現行課程と旧課程の〈目標〉を比較すると学習すべき概念的事項が示されるようになったことがわかる。科目学習の目標として、乳児保育の意義・目的、保育所・乳児院以外も含めた保育の場を知ること、3歳未満児の保育内容と運営体制、職員間の連携・協働(以上は「乳児保育Ⅰ」)、(保育士等の)援助や関わり、養護と教育の一体性、配慮の実際、具体的な理解(以上は「乳児保育Ⅱ」)が〈目標〉として明記されるようになった。また「乳児保育」が0歳児保育のことだけではなく3歳未満児を念頭においた保育であることが明記された⁽²⁾。保育の場の多様化、3歳未満児における保育内容の明確化、養護を土台とした3歳未満からの教育の意識化、実践力のための具体的理解を目指した課程の改定であったと読み取れる。次に〈内容〉について比較する。

〈内容〉について新たに加わった用語は、乳児保育の意義・目的、養護及び教育、子育て家庭、児福祉施設、生活と環境、遊びと環境、3歳以上の保育に移行する時期(以上「乳児保育Ⅰ」から)である。目的の明確化、保育が養護と教育を担うものであること、子育て家庭や児童福祉施設といった保育所や乳児院にとどまらない施設や家庭での乳児保育を念頭においていること、生活や遊びを支える環境の重要性、3歳以上児の保育への移行期への配慮の視点が読み取れる。加えて「乳児保育Ⅱ」の〈内容〉に新たに加わっているのは、実践に通じる項目である。

子どもと保育士等との関係の重要性、個々の子どもに応じること、受容的・応答的に関わること、子どもの主体性の尊重、子どもの体験と学びの芽生えという項目・用語が加わっている。さらに生活と遊

びの実際、生活と援助の実際、遊びと援助の実際、子ども同士の関わりとその援助の実際、配慮の実際（健康・安全と情緒の安定を図るため、集団での生活、移行）、計画の実際（長期的、短期的、個別的、集団）という用語が用いられ「実際」という語が繰り返されている⁽²⁾。以上から乳児保育を実践するための具体的な知識や技能の習得が求められていることが読み取れる。

ではなぜこのような改定が実施されたのであろうか。2018年度入学生までは「乳児保育」は演習1単位が基準であったが、2019年度入学生からは「乳児保育Ⅰ」（講義2単位）、「乳児保育Ⅱ」（演習1単位）となった。保育所保育指針の改定の背景の一つには乳児保育のニーズの高まりが挙げられている⁽²⁾。厚生労働省の資料によれば1・2歳児の保育所利用率（利用児童数／就学前児童数）は増加傾向であった。2009年には31.3%だった1・2歳児の利用率は、2016年には41.4%になり、待機児童に占める1・2歳児の割合は71.1%となった⁽³⁾。このような保育ニーズの増加傾向を受けて、保育所保育指針の改訂で乳児・3歳未満児保育の記載は充実した。保育所保育指針の改訂では3歳以上児とは別の項目を設けるなど3歳未満児に関する記載内容の充実が掲げられた。特に0歳児の保育については、乳児（ここでは0歳児を指す）を主体と捉え、「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」「健やかに伸び伸びと育つ」という視点から保育のねらい・内容を整理・充実する方向性が示されてきた⁽⁴⁾。このような状況下で行われた「保育士養成課程の見直し」における『『乳児保育』に関する内容充実、科目検討についての調査』にて、社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育士会は「現場での具体的な場面の提示や、理論と演習を組み合わせるなど、保育現場のイメージをもちやすくすることを目的とした内容の充実を図るとともに、乳児期から「教育」があることを明確にすることが必要であると指摘している⁽⁵⁾。さらに指定保育士養成施設対象の調査「今後、さらに充実させる必要があると考えられる科目（複数回答）」では、1. 乳児保育（44.2%）、2. 障害児保育（22.7%）、3. 保育内容演習（17.4%）という結果が示された⁽⁶⁾。これらを踏まえて保育士養成課程等検討会は、低年齢児（3歳未満児）の保育内容を充実し、教育効果を高められるようにするよう養成課程の改定の方向性を打ち出した。講義科目で基礎的事項の理解を深めた上で、より円滑に保育実践力の習得につなげていくことが必要との方向性を示したのである⁽⁷⁾。このようにして「乳児保育Ⅰ（講義）」で乳児保育（3歳未満児の保育）に関する意義・目的、現状と課題、3歳未満児の発育・発達と保育内容、職員間や保護者・地域との連携について理解し、それを土台に、「乳児保育Ⅱ（演習）」で保育士としての援助や関わりの基本的考え方、生活・遊び・保育の方法・環境への具体的理解、配慮の実際、計画の作成の具体的理解について学ぶ課程が構築された。

保育士養成課程において、3歳未満児の保育の現状と課題、発達の特性、保育の内容の理解に基づいた援助・関わり・配慮・保育計画等の実践力の強化が求められ実行されたのである。

三

4 保育士養成校におけるシラバスと授業展開の実際

次にS短期大学のシラバスと厚生労働省の教科目の目標と教授内容を比較してみる。

表1 乳児保育Ⅰ 2020年度S短期大学シラバスと該当する厚生労働省の目標・教授内容

目標	2020年度「乳児保育Ⅰ」シラバス到達目標	厚生労働省が示す「乳児保育Ⅰ」目標
1	3歳未満児保育の現代的意義と重要性を認識する。	1.乳児保育の意義・目的と歴史の変遷及び役割等について理解する。
2	<u>0,1,2歳の心身の発達</u> を踏まえた保育の内容を理解する。	2.保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。
3	<u>0,1,2歳の生活や遊び</u> を保障する環境を理解する。	3. <u>3歳未満児の発育・発達を踏まえた</u> 保育の内容と運営体制について理解する。
4	3歳未満児保育における計画・記録について理解を高める。	3. <u>3歳未満児の発育・発達を踏まえた</u> 保育の内容と運営体制について理解する。
5	<u>保護者への支援</u> について意識を高め、連携について理解する。	4.乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する。
内容	2020年度「乳児保育Ⅰ」シラバス授業内容	厚生労働省が示す「乳児保育Ⅰ」教授内容
1	乳児保育の基本（乳児保育はなぜ必要か、妊娠～出産までを知る）	1(1)乳児保育の意義・目的と歴史の変遷
2	乳児保育の意義（親になるということ）	1(2)乳児保育の役割と機能 1(3)乳児保育における養護及び教育
3	乳児保育の現状と課題 （保育所における乳児保育、保育所以外の施設における乳児保育）	2(1)乳児保育及び子育てで家庭に対する支援をめぐる社会的状況と課題 2(3)保育所以外の児童福祉施設（乳児院等）における乳児保育 2(4)家庭的保育等における乳児保育
4	保育所保育指針における乳児保育（乳児とは）	2(2)保育所における乳児保育
5	0歳児の生活と環境	3(1)3歳未満児の生活と環境
6	0歳児の遊びと環境（抱っことおんぶ）	3(2)3歳未満児の遊びと環境
7	1歳児の生活と環境	3(1)3歳未満児の生活と環境
8	1歳児の遊びと環境	3(2)3歳未満児の遊びと環境
9	2歳児の生活・遊びと環境	3(1)3歳未満児の生活と環境 3(2)3歳未満児の遊びと環境 3(3)3歳以上児の保育に移行する時期の保育
10	保育士等による援助やかかわり、配慮	3(4)3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育士等の援助や関わり 3(5)3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育における配慮
11	乳児保育における記録① デイリープログラムと個別指導計画	3(6)乳児保育における計画・記録・評価とその意義
12	乳児保育における記録② 乳児の個別指導計画の理解と作成	3(6)乳児保育における計画・記録・評価とその意義
13	乳児保育における連携・協働① 職員間・地域との連携を考える	4(1)職員間の連携・協働 4(3)自治体や地域の関係機関等との連携・協働
14	乳児保育における連携・協働② 保護者との連携・協働、保護者支援を考える	2(5)3歳未満児とその家庭を取り巻く環境と子育て支援の場 4(2)保護者との連携・協働
15	まとめ（授業内容全体の振り返りと確認）	すべての内容

※ 下線_____は筆者ら。

表1に示すS短期大学のシラバスの目標、内容は過不足なく厚生労働省の示す目標、内容と対応している。厚生労働省の科目設定の考え方として、「乳児保育Ⅰ」は実践力の土台としての基礎的事項を理解するための講義科目である。基礎的事項として、3歳未満児の保育の現状と課題、3歳未満児の発達特性、3歳未満児の保育の内容、保育における連携・協働が挙げられていると読み取れる。基礎的事項のさらに土台となる知識が、表1に下線_____をつけた「0、1、2歳児の心身の発達」「0、1、2歳の生活や遊び」「保護者への支援（保護者のニーズ）」となる。しかしながら現在の短期大学生は3歳未満児の一般的な発達過程や生活や遊びの様子、子育ての難しさを具体的に知る生活経験が極めて少ない。この生活経験の少なさは3歳未満児の発達や生活、遊びの理解を困難なものにしている。原田は自分の子どもを産む以前の育児体験が自分の子どもの子育てに影響することを示唆している⁽⁸⁾。1980年と2003年を比較する大規模な子育て実態調査の中で、出産以前に小さい子どもを抱いたり遊ばせたり食べさせたりおむつを替えたりする経験が減少し、特に食やおむつ替えの未経験者が半数を越えていく実態を示している。また中谷は、小学校・中学校・高等学校の時期に行われる保育体験についての調査で、中学校では概ね半数の生徒が保育体験を経験していること、高等学校の保育体験では生徒の希望に基づく体験となっており実施回数は1~2回、時間も2時間程度が多くみられることを指摘している⁽⁹⁾。このような乳幼児と触れ合う経験の少なさは、乳幼児の実像の理解を難しくするものだろう。基礎的事項の用語が子どもの実際の姿と結びつかなければ、基礎的事項の学習は言葉のみの学習となってしまう実践に生かされる知識となりにくい。ある程度の経験知があるからこそ知識の体系化が理解でき、知識の体系化をもとに新たな場面での応用が可能になるものである。矢萩は中高生に対する保育体験の支援事業の中で、支援の改善点の1つとして事前指導の内容を、講義やVTR視聴から授乳やおむつ交換の体験へという順序から、実技系の内容を講義系内容の先に行ったり、手作りおもちゃ製作や自らの幼児体験を感覚的に思い起こすようなおもちゃや絵本で自由に遊んでみる内容を取り入れたりし、より保育体験が効果的になるよう工夫した旨を記している⁽¹⁰⁾。実技的なことや体験的なことを利用しながら基礎的事項、概念的学習を行う工夫が、「乳児保育Ⅰ」においては必要であるのかもしれない。

表2では、「乳児保育Ⅱ」についてS短期大学のシラバスと厚生労働省の基準とを比較する。

表2 乳児保育Ⅱ 2021年度S短期大学シラバスと該当する厚生労働省の目標・教授内容

目標	2021年度「乳児保育Ⅱ」シラバス到達目標	厚生労働省が示す「乳児保育Ⅱ」の目標
1	3歳未満児の発達・特性について説明できる。	1. 3歳未満児の発育・発達の過程や特性を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方について理解する。
2	3歳未満児の遊びや生活、保育の環境について構想できる。	2. 養護及び教育の一体性を踏まえ、3歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境について、具体的に理解する。
3	3歳未満児の発達・特性を踏まえた具体的な援助や配慮の仕方について構想できる。	3. 乳児保育における配慮の実際について、具体的に理解する。
4	乳児保育における計画を理解し、作成できる。	4. 上記1～3を踏まえ、乳児保育における計画の作成について、具体的に理解する。
内容	2021年度「乳児保育Ⅱ」シラバス授業内容	厚生労働省が示す「乳児保育Ⅱ」教授内容
1	子どもと保育士等との関係の重要性 (受容的で応答的な関わり)	1(1)子どもと保育士等との関係の重要性 1(2)個々の子どもに応じた援助や受容的・応答的な関わり
2	子どもの主体性の尊重と自己の育ち 子どもの体験と学びの芽生え	1(3)子どもの主体性の尊重と自己の育ち 1(4)子どもの体験と学びの芽生え
3	3歳未満児の発達過程のイメージと理解	2(3)3歳未満児の発育・発達を踏まえた生活と援助の実際
		2(4)3歳未満児の発育・発達を踏まえた遊びと援助の実際
4	一日の生活の流れと保育の環境	2(1)子どもの1日の生活の流れと保育の環境
5	遊びと援助の実際①0歳児の遊びの援助	2(2)子どもの生活や遊びを支える環境の構成 2(4)3歳未満児の発育・発達を踏まえた遊びと援助の実際
6	遊びと援助の実際②1, 2歳児の遊びの援助	2(2)子どもの生活や遊びを支える環境の構成 2(4)3歳未満児の発育・発達を踏まえた遊びと援助の実際
7	生活と援助の実際①授乳・離乳食	2(2)子どもの生活や遊びを支える環境の構成 2(3)3歳未満児の発育・発達を踏まえた生活と援助の実際
8	生活と援助の実際②衣服の着脱・排泄・沐浴	2(2)子どもの生活や遊びを支える環境の構成 2(3)3歳未満児の発育・発達を踏まえた生活と援助の実際
9	遊びと援助の実際③発達や興味に即した玩具づくり	1(4)子どもの体験と学びの芽生え 2(4)3歳未満児の発育・発達を踏まえた遊びと援助の実際
10	子ども同士の関わりとその援助の実際(自我の芽生えの視点から)	2(5)子ども同士の関わりとその援助の実際
11	乳児保育における配慮の実際①子どもの健康・安全に関して	3(1)子どもの心身の健康・安全と情緒の安定を図るための配慮
12	乳児保育における配慮の実際②環境の変化・3歳児クラスへの進級に向けての配慮	3(2)集団の生活における配慮 3(3)環境の変化や移行に対する配慮
13	乳児保育における計画の実際①長期・短期的な計画	4(1)長期的な指導計画と短期的な指導計画
14	乳児保育における計画の実際②集団・個別の指導計画の立案	4(2)個別的な指導計画と集団の指導計画
15	乳児保育の理念と課題、乳児保育Ⅱのまとめ	すべての内容

※ 下線_____は筆者ら。

表2に示すS短期大学のシラバスの目標、内容についても過不足なく厚生労働省の示す目標、内容と対応している。「乳児保育Ⅱ」では実際の保育実践を具体的に実施できるための具体的知識や判断力、実践的技能の獲得が期待されている。「具体的な実際の姿」を知り、そこから知りえたことを体系的な枠組みに位置づけ、実践場面で活用していくことが期待されていると言えるだろう。S短期大学のカリキュラムでは、「乳児保育Ⅱ」は保育所実習Ⅰ（観察・参加を主にした概ね2週間の実習）終了後に「乳児保育Ⅱ」は配置されている。ある程度の乳幼児の発達特徴、心持ちや行動がイメージできる状況での学習となる。しかしながら、0歳、1歳、2歳の時期は発達の大きな変化の大きい時期であるので、その実際の姿を前提に援助や配慮、計画の必要性や計画の作成を学ぶためにはかなりしっかりと体系的な発達過程のイメージが必要で、子どもの姿に対する想像力が必要なことは否めない。小林は、領域「人間関係」に関する授業内容の検討において、実習を経験した学生を対象とした授業で「講義による専門的事項の学習→実践的な指導法の学習（教材研究、模擬保育、グループワーク）」という構成で授業を行い、専門的事項の獲得と専門的知識から保育を構想する力の学びに手ごたえを感じた旨の報告をまとめている⁽¹¹⁾。「乳児保育Ⅱ」においても実践力の向上を目指すためには、基礎的事項の確認を土台にした実践的・体験的な内容を含む授業構成が必要であるだろう。授乳、離乳食、おむつ交換など手順が確立している技能を実践的に学ぶことも期待されるであろうことに加え、子どもを主体とした応答的・受容的な援助や関わり、配慮、環境構成をどのような方法で学んでいくことが効果的であるのかは授業方法や授業内容の具体的な検討の積み重ねが必要になる。よって本稿では、「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」について学生がどのように授業を受け止めたかの実態を把握することを試みる。

5 アンケート調査の目的と方法

5-1 目的

前項において保育士養成課程において「乳児保育」を丁寧に学ぶことになった経緯と学ぶ内容の基準について述べた。それらを踏まえ、本研究では、保育士養成校として、「乳児保育」に関する授業に対する学生の受け止めの実態を把握し、実態に見合った具体的な習得目標や授業展開の検討のための手がかりを掴むことを目指す。厚生労働省による保育士養成課程の考え方としては、まず講義によって理論的・概念的学習を行い、その見方・考え方を踏まえて演習によって実践的学習を行う道筋が示されている。本項では、実際に何についての学習が学生の心に残ったのかを知ることを通して、理論的・概念的学習を踏まえた実践的学習となっていたのかを振り返り、授業展開への示唆を得ることを目指したい。

七

5-2 方法

学生の現状や意識を知るための方法として、以下のようにアンケート調査を実施した。

(1) 対象者：2021年度（前期）「乳児保育Ⅱ」履修者

(2) アンケート調査の方法：

＜期間＞ 2021年7月20日～2021年7月30日

＜手続き＞授業終了時に調査用紙を配布して筆者らが学生に調査についての説明を行い、回答の

協力を求めた。

＜調査項目＞調査項目は6項目で全て記述式での自由回答とした。項目は以下の通りである。

- ① 短大に入学前に0歳～2歳児と関わった経験はありましたか？ あった方はどのような経験でしたか？
- ② 短大入学前には0歳～2歳児にはどのようなイメージをもっていましたか？
- ③ 1年次後期(2020年度)の『乳児保育Ⅰ』の授業を通して学んだこと、身についたことについて記入してください。
- ④ 『保育所実習Ⅰ』(2021年2月)を通して、0歳～2歳児の保育について学んだことや気づいたことについて記入してください。
- ⑤ 2年次前期(2021年度)の『乳児保育Ⅱ』の授業を通して学んだこと、身についたことについて記入してください。記入時まで実施済みの授業についてお書きください。
- ⑥ 『乳児保育Ⅰ』『乳児保育Ⅱ』でもっと学びたかったことや扱ってほしかったことについて書いてください。

学習の経過を捉えるために、学生の体験の時系列に沿った質問構成とした。まず「乳児保育」の学習開始前の3歳児未満児への知識等に関する質問(①、②)を配置し、次に「乳児保育Ⅰ」(講義)科目での学びを振り返る質問(③)、さらにその後実施された保育所実習を振り返る質問(④)、次に「乳児保育Ⅱ」(演習)科目での学びを振り返る質問(⑤)、最後に全体を通して補完したい学習内容を問うことで自らの学習に足りない事項を明らかにできるようにした。

＜分析＞各質問項目に自由記述で書かれた事項について、KJ法により分類、整理し、傾向特徴を把握した。

(3) 倫理的配慮：

調査の実施にあたり、「洗足こども短期大学研究倫理委員会」より承認された方法とした。提出は任意で記入できる項目だけでも構わないこと、提出の有無や内容は成績に一切反映されないが、回答は無記名で用意された封筒に入れて封をして提出箱へ提出するので個人が特定されないことを説明した。

6 アンケート調査結果

6-1 概要

調査用紙配布当日の授業に出席した学生、7クラス合計238名に配布し、91名から回答を得た。回収率は38.2%であった。

6-2 乳児に関わる短大入学前の経験

質問項目「①短大に入学前に0歳～2歳児と関わった経験はありましたか？ あった方はどのような経験でしたか？」の結果については以下の通りである。

1) 集団保育における関わり 13名： 親戚 22、家族（妹・弟）13、友人／知り合い／近所が 11
2) 個人的な関係での関わり 46名： 職業体験や高校の授業が 7名、ボランティアやバイトが 6名
3) 記載なし 3名

乳児との関わりの経験があった学生は 57 名、なかった学生は 30 名、未記入が 4 名であった。
 経験の内容については以上の通りであり、乳児についての集団保育の中での経験は少なかった。
 概ね 60%の学生が入学前に何らかの 0 歳～2 歳児との関わり経験を持っているという結果だった。

6-3 乳児に対する短大入学前のイメージ

質問項目「②短大入学前には 0 歳～2 歳児にはどのようなイメージをもっていましたか？」の結果については以下の通りである。

1) ポジティブイメージ 68 名： かわいい 58、癒やし 3、柔らかい／プニプニしている 2、元気／よく動く 2、よく笑う 2、やさしい／あたたかい／素直／純粹 1
2) ネガティブイメージ 38 名： 難しい／わからない 11、大変／手がかかる 7、言葉で意思疎通できない・難しい／話せない 7、弱い／繊細／すぐ傷つく／すぐ怪我をする 6、不安／怖い 3、イヤイヤ期 2、わがまま 1、苦手 1
3) どちらでもない 51 名： 小さい 16、何もできない／援助が必要／守ってあげないといけない 9、赤ちゃん 8、よく泣く／すぐ泣く 8、成長が早い 3、ハイハイ／よちよち 2、よく寝る／昼寝する 2、よくしゃべる 1、一人遊びが多い 1、怪獣 1
4) 未記入 2 名

「かわいい」が圧倒的多数で乳児に対するポジティブイメージは多かった。なお、「かわいい」のみを挙げた学生は 19 名、「小さい」と「かわいい」の 2 つを挙げた学生は 8 名であった。

一方、「難しい」や「大変」等のネガティブイメージを挙げる学生も多かった。

ポジティブイメージを持っていた学生がおよそ 75%、ネガティブイメージを持っていた学生がおよそ 41%であり、「かわいい」を中心に複数のイメージを抱いていた様子が伺えた。

6-4 「乳児保育Ⅰ」（1 年生後期）で学んだこと、身についたこと

質問項目「③ 1 年次後期（2020 年度）の『乳児保育Ⅰ』の授業を通して学んだこと、身についたことについて記入してください。」の結果については以下の通りである。

1) 保育方法・実践 52 名： 沐浴 14、心肺蘇生法/AED12、玩具／ペープサート 6、抱っこ／おんぶ 5、授乳／調乳 3、衣服の着脱／着替え 3、排泄／おむつ交換 3、実践力／人形使用 3、手遊び 1、乳児に必要な道具 1、乳児保育の方法 1
--

2) 乳児保育の知識 35 名： 乳児との関わり方 / 触れ合い方 / 援助方法 / 声掛け 30、病気や怪我の対応 1、事故・危険の対応 1、保育計画 1、子育て支援 1、専門的知識 1
3) 乳児について 16 名： 乳児の様子 / 特性 7、乳児の発達 7、喃語 2
4) その他 5 名： 愛着関係が大切 3、子どもの気持ちになることが大切 1、大変だということがわかった 1
5) 未記入 17 名、不明・質問外感想等 3 名

保育方法・実践については、乳児人形を用いた生活の援助の体験的学びが身に付いたとの回答が最も多かった。乳児保育の知識に関することでは、「乳児との関わり方 / 触れ合い方 / 援助方法 / 声掛け」という、すぐに実践につながる内容が多かった。体験的学習の実施や実践的内容の学習効果の高さが示唆される結果となった。

6-5 「保育所実習 I」（1 年終了後）で乳児の保育について学んだこと

質問項目「④『保育所実習 I』（2021 年 2 月）を通して、0 歳～2 歳児の保育について学んだことや気づいたことについて記入してください。」の結果については以下の通りである。

1) 知識の確認 / 乳児 40 名： 乳児の様子 18、年齢による違い / 個人差 15、著しい発達・成長 2、乳児の特徴 2、人見知り / 愛着形成 2、体温が高い 1
2) 知識の確認 / 保育者 39 名： 関わり方 / 接し方 / 援助の方法 22、声掛け / 会話 6、保育者の配慮 2、事故防止対策 2、乳児保育の楽しさ 2、乳児保育の難しさ 1、乳児主体の保育 1、担当制 1、複数担任 1、デイリープログラム 1
3) 実践 11 名： 食事の援助 / 離乳食 2、沐浴 2、抱っこ 1、オムツ替え 1、調乳 1、乳児の養育方法 1、心肺蘇生法 1、手遊び 1、教材作り 1
4) その他 2 名： 乳児はかわいい 2
5) 乳児配属なし / 実習なし 5、未記入 20、不明 1

「乳児保育 I」などの学内の授業で学んだ乳児に関する知識や保育者の役割や関わりなどの知識について、実際の乳児の姿や保育者の姿から確認できた旨の記載者が全体の概ね 85%（上記分類の 1、2 の合計）と多く、実践の中で学んだ知識を確認できた様子が伺えた。「年齢による違い / 個人差」の 15 名の内、思ったよりもできることが多いと感じた学生が 5 名、思ったよりも意思疎通が可能だと感じた学生が 3 名おり、乳児は自分ではほとんど何もできないと思っていたことが伺える。また、「関わり方 / 接し方 / 援助の方法」の 22 名の内、受容と応答が大切、コミュニケーションが大切との記載があった。「関わり方 / 接し方 / 援助の方法」や「声掛け / 会話」については、実践した可能性もあるが、今回の質問形式からは判断できなかった。教科書や授業で学んだ知識と実際の乳児の反応が全く違ったとの記載もあった。一方、実践体験に関する記載者は全体の 12% とそれほど多くなく、実習先での乳児

保育に関する実践体験は必ずしも十分ではないことが伺えた。

6-6 「乳児保育Ⅱ」（2年生前期）で学んだこと、身についたこと

質問項目「⑤2年次前期（2021年度）の『乳児保育Ⅱ』の授業を通して学んだこと、身についたことについて記入してください。記入時まで実施済みの授業についてお書きください。」の結果については以下の通りである。

1) 実践 73 名： オムツ替え / 排泄の自立 14、沐浴 14、人形 / 実践 / 実技 / 世話 / 生活の援助 9、心肺蘇生 / AED / 応急処置 7、衣服の着脱 / 着替え 6、授乳 / 調乳 6、抱っこ / おんぶ 5、手遊び / 触れ合い遊び / わらべ歌 5、離乳食 / 食事 3、緊急時 / 災害時の対応 3、ペーパーサート 1
2) 知識 33 名： 保育者の援助 / 対応 / 配慮 21、乳児の発達 / 特性 4、乳児の事故・危険 3、指導計画の書き方 2、乳児の様子 / 行動 1、保育者の役割 1、乳児院 1
3) 未記入 22 名、不明 / 質問外感想等 6 名

実践に関することが知識に関することよりも2倍以上多かった。知識に分類した「保育者の援助 / 対応 / 配慮」については実践に関するものの可能性があったが、今回の結果では知識的な内容について学生が学習できた実感を持てたという結果ではなかった。1年次の内容をより深く学んだ、より実践的に学んだ等の記載もあったが、具体的に何を深められたのかまではあきらかにされていなかった。

6-7 「乳児保育Ⅰ・Ⅱ」の授業で学びたいこと、学びたかったこと

質問項目「⑥『乳児保育Ⅰ』『乳児保育Ⅱ』でもっと学びたかったことや扱ってほしかったことについて書いてください。」の結果については以下の通りである。

1) 実践 32 名： 実践 / 人形使用 13、オムツ替え 3、沐浴 3、離乳食 3、抱っこ / おんぶ 2、授乳 2、遊び / 手遊び 2、教材 / 部分・責任実習 2、衣服の着脱 / 着替え 1、生活場面の援助 1
2) その他 4 名： 映像 2、保育所の事例 1、実際の乳児に触れる機会 1
3) 特になし / 学べた 20 名
4) 未記入 36 名、不明 / 質問外感想等 5 名

実践に関することをもっと学びたかったこととして記載した者が全体の概ね 35%で、もっと人形を使用する機会を増やしてほしいが 8 名、繰り返し実施してほしいが 2 名おり、身につくまでしっかり学びたいという要望がわかった。また特に学びたいことを挙げていない回答者が 22%おり、ある程度満足が得られている可能性がある。回答には「新型コロナウイルス感染症感染拡大の現状では難しいと思うが」との記載があり、昨年度からの特殊な学習環境による影響もあることもわかった。

7 結果と考察

今回のアンケート調査結果では、学生の学習の振り返りとして乳児保育の意義・目的に関する記載はなかったことから、理論・概念的学習は印象や記憶に残りにくい・学生が十分理解していない可能性が高く、授業での扱い方に検討が必要である。一方で3歳未満児の発達や個人差については、学習した知識を実習で確認・実感できているようであり学習効果があることが示唆された。保育の場の多様化や保育内容自体の理解、養護を踏まえた教育の視点、実践的な事項の理解・習得について把握しきれていない事項が分かり、知識・概念の獲得とともに課題となる。また入学前の乳児との関わりの経験は個人差が大きく、乳児や乳児保育に対してネガティブイメージを持っている学生もいることを念頭に授業内容を見直す必要があることもわかった。乳児の生活の援助の実際について学んだことが身についたと感じている学生が多く、特に乳児人形を用いた練習については、体験を求める回答が多いことから厚生労働省が示す教授内容を確認しながら、演習科目「乳児保育Ⅱ」では特に体験的学習に配慮する必要があるだろう。講義科目の「乳児保育Ⅰ」の中でも人形を使用するなどの実践的な内容を増やすことも検討の余地がある。保育方法や保育者の援助・配慮等についての人形等の活用による体験的学習は、保育所実習の実践体験により強化される場合もある。しかし、実習において乳児保育に全く関われない学生もあり、その点へのフォローは必要である。保育所実習による乳児保育の体験的学習の有無にかかわらず「乳児保育Ⅰ・Ⅱ」として実践的学習を設計する必要がある。

8 まとめ

乳児保育の学びの充実が求められている中で、実際に「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」を受講した学生へのアンケート調査によって、理論・概念的な理解に基づく実践的知識や能力の習得という学習モデルを型通りに実践することは難しく、学習効果の観点から体験的実践的学習のニーズを踏まえながら応用力の土台となる理論・概念的学習をどのように織り交ぜて授業展開を行うかが課題であることが示唆された。今後の乳児保育の授業展開については、厚生労働省の示す基準を踏まえて体験的実践的学習（演習）と理論・概念的学習（講義）のバランスと順序を学生への学習効果に配慮しながら柔軟に検討したい。今後は、より具体的な体験的実践的学習（演習）の方法の検討が課題である。加えて、現状ではあまり効果的でないことが示唆された理論・概念的学習（講義）に関する授業展開の工夫に関し、学習実態を把握しながら効果的な学習について検討を進めていくことが課題である。

引用文献

- (1) 厚生労働省 2017「保育所保育指針解説」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf> : 2-4
- (2) 厚生労働省 2017「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」(2017年12月4日保育士養成検討会) 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について〔別添1〕<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/betten1.pdf> : 33-36

- (3) 厚生労働省 2017「保育所保育指針改定について」
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-1s1.pdf12
- (4) 厚生労働省 2017「保育所保育指針改定について」
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-1s1.pdf18
- (5) 厚生労働省 2017「ヒアリング資料」厚生労働省第7回保育士養成課程等検討会資料1-2
- (6) 厚生労働省 2017「保育士養成課程の教育内容に関するアンケート調査（結果概要）」厚生労働省第8回保育士養成課程等検討会参考資料2
- (7) 厚生労働省 2017「保育士養成課程の見直しに向けた検討状況について」厚生労働省第8回保育士養成課程等検討会資料1-1
- (8) 原田正文 2006「子育ての変貌と次世代育成支援」名古屋大学出版会：142-144,159-161
- (9) 中谷奈津子 2016「親性準備性に向けた『保育体験』における効果—文献レビューからみる小・中・高家庭科教育—」大阪府立大学紀要（人文・社会科学）64巻：42-43
- (10) 矢萩恭子 2007「次世代育成としての乳幼児とのふれあい体験～中学生・高校生の『保育体験学習』に関する実践の検討～」田園調布学園大学紀要第2号：136-137
- (11) 小林美沙子 2020「領域の専門知識と保育構想をつなげる授業内容の検討：領域および保育内容の指導法に関する科目（人間関係）の授業実践から」島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報 1号：32-41

参考文献

- 遠藤純子 2020「乳児保育の質をめぐる現場と課題—関係性をベースとした保育の展開に向けて—」学苑・初等教育学科紀要 No.956：2-17
- 藤重育子 2018「保育専門科目『乳児保育』における授業展開についての再検討」園田学園女子大学論文集第52号：109-115
- 福鹿慶子・北村真樹 2020「乳児の理解につながる授業を目指して—乳児保育の学びに関する調査から—」奈良佐保短期大学研究紀要第28号：61-67
- 井田史子・前田隆子・鈴木恭子・菊原美緒 2016「幼児教育保育学科学生の乳児保育学習による親準備性の変化」鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要73号：1-9
- 木村直子・塩路晶子 2016「乳児への保育実践力を身につける授業の可能性—大学内の赤ちゃんサロンに参加した保護者への調査から—」鳴門教育大学授業実践研究—授業改善をめざして—第15号：3-8
- 小島千恵子・市野繁子 2019「乳児保育の充実—保育所保育の現状からの—考察—」名古屋短期大学研究紀要第57号：37-49
- 松浦淳・熊井正之 2018「乳幼児にかかわる保育所の専門性に関する2007年から2017年までの研究動向」青森中央短期大学研究紀要第31号：85-109
- 森田健宏・井上千晶 2009「『乳児保育』担当保育士の資質と養成機関の課題」夙川学院短期大学教育実践研究紀要第5類：72-76
- 西村真実 2015「乳児保育研究に示された課題についての検討」帝塚山大学現代生活学部紀要第11号：95-102
- 野澤祥子・淀川裕美・高橋翠・遠藤俊彦・秋田喜代美 2016「乳児保育の質に関する研究の動向と展望」東京大学大学院教育学研究科紀要第56巻：399-419
- 志村聡子 2018『はじめて学ぶ乳児保育第二版』同文書院
- 塩路晶子・松下明日香 2019「学部授業『乳児保育』における保育イメージの具体化に関する一考察—現職保育士と連携した授業の可能性—」鳴門教育大学授業実践研究—授業改善を目指して—第18号：1-5